

清兵衛と瓢箪・網走まで

NO. 647.

SHINJUKU-KU, TOKYO

志賀直哉



新潮文庫



せいべえ ひょうたん
清兵衛と瓢箪・
おぼしり
網走まで

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫草 30 D

昭和四十三年九月十五日 発行
昭和四十八年七月十五日 十刷

著者 志賀直哉

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

清兵衛と瓢箪 網走まで

志賀直哉著



新潮社版

1801

目次

菜の花と小娘	七
或る朝	一三
網走まで	二
ある一頁	三三
剃刀	六
彼と六つ上の女	七五
濁った頭	八一
老人	一三五
襖	一三一
祖母の為に	一四三
母の死と新しい母	一五五

クローディアスの日記	一六七
正義派	一八七
鶴沼行	一九七
清兵衛と瓢箪	二一一
出来事	二一九
范の犯罪	二三七
児を盗む話	二四三

解説 高田 瑞穂

清兵衛と瓢箪・網走まで

菜の花と小娘

或る晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾っていました。

やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其処で自分の背負って来た荒い目籠に詰め始めました。

不図、小娘は誰かに自分が呼ばれたような気がしました。

「ええ？」小娘は思わずそう云って、起ってその辺を見廻しましたが、其処には誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰？」小娘はもう一度大きい声でこう云って見ましたが、やはり答える者はありませんでした。

小娘は二三度そんな気がして、初めて気がつくとき、それは雑草の中から只一本、僅に首を差し出している小さい菜の花でした。

小娘は頭に被っていた手拭で、顔の汗を拭きながら、

「お前、こんな所で、よく淋しくないのね」と云いました。

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答えました。

「そんなら何故来たのさ」小娘は叱りでもするような調子で云いました。菜の花は、

「雲雀の胸毛に着いて来た種が此処で零れたのよ。困るわ」と悲しげに答えました。そして、どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行って下さいと頼みました。

小娘は可哀相に思いました。小娘は菜の花の願いを叶かなえてやろうと考えました。そして静かにそれを根から抜いてやりました。そしてそれを手に持って、山路を村の方へと下って行きました。

路に添うて清い小さな流れが、水音をたてて流れていました。暫しばらくくすると、

「あなたの手は随分ほてるのね」と菜の花は云いました。「あつい手で持たれると、首がだるくなって仕方がないわ、真直ぐにしていられなくなるわ」と云って、うなだれた首を小娘の歩調に合せ、力なく振っていました。

小娘は一寸ちよつと当惑しました。

然し小娘には図はからず、いい考が浮びました。小娘は身軽く路端みちばたに蹲しゃがんで、黙って菜の花の根を流れへ浸してやりました。

「まあ！」菜の花は生き返ったような元気な声を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するように、

「このまま流れて行くのよ」と云いました。

菜の花は不安そうに首を振りました。そして、

「先に流れて了しまうと恐こわいわ」と云いました。

「心配しなくてもいいのよ」そう云いながら、早くも小娘は流れの表面で、持っていた菜の花を離して了しまいました。菜の花は、

「恐こわいわ、恐こわいわ」と流れの水にさらわれながら、見る見る小娘から遠くなるのを恐ろしそうに

叫びました。が、小娘は黙って両手を後へ廻し、背で跳る目籠をおさえながら、駆けて来ます。菜の花は安心しました。そして、さも嬉しそうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

何処からともなく気軽な黄蝶が飛んで来ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで来ました。菜の花はそれをも大変嬉しがりました。然し黄蝶は性急で、移り気でしたから、何時か又何処かへ飛んで行ってしまいました。

菜の花は小娘の鼻の頭にポツポツと玉のような汗が浮び出しているのに気がつきました。

「今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配そうに云いました。が、小娘は却って不愛想に、
「心配しなくてもいいのよ」と答えました。

菜の花は、叱られたのかと思つて、黙つてしまいました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打っている髪の毛のような水草に根をからまれて、さも苦し気に首を振っていました。

「まあ、少しそうしてお休み」小娘は息をはずませながら、そう云つて傍の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、気持が悪いわ」菜の花は尚しきりにイヤイヤをしていました。

「それで、いいのよ」小娘は云いました。

「いやなの。休むのはいいけど、こうしているのは気持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。ど

うか」と菜の花は頼みましたが、小娘は、

「いいのよ」と笑って取り合いません。

が、その内水の勢で菜の花の根は自然に水草から、すり抜けて行きました。そして不意に、「流れるう！」と大きな声をして菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それを追って駆け出しました。

少し来た所で、

「やはりあなたが苦しいわ」と菜の花はコワゴワ云いました。

「何でもないのよ」と小娘も優しく答えて、そうして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駆けて行く事にしました。

麓の村が見えて来ました。小娘は、

「もう直ぐよ」と声を掛けました。

「そう」と、後で菜の花が答えました。

暫く話は絶えました。只流れの音に混って、パタパタ、パタパタ、と小娘の草履ぞうりで走る足音が聴きえていました。

チャポーンと云う水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にそうなる悲鳴をあげました。小娘は驚いて立ち止りました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪あめたようになって、

「早く早く」と延び上っています。小娘は急いで引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱いだくようにして、後の流れを見廻しました。

「あなたの足元から何か飛び込んだの」と菜の花は動悸どうきがするのので、言葉を切りました。「いぼ蛙がえるなのよ。一度もぐって不意に私の顔の前に浮び上ったのよ。口の尖とがった意地の悪そうな、あの河童かっぱのような顔に、もう少して、私は頬っぺたをぶつけるところでしたわ」と云いました。

小娘は大きな声をして笑いしました。

「笑い事じゃあ、ないわ」と菜の花はうらめしそうに云いました。「でも、私が思わず大きな声をしたら、今度は蛙の方で吃驚びっくりして、あわててもぐって了しまいましたわ」こう云って菜の花も笑いしました。

間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の菜畑なえぼに一緒にそれを植えてやりました。

其処は山の雑草の中とは異ちがって土がよく肥えておりました。

菜の花はどんどん延び育ちました。

そうして、今は多勢の仲間と仲よく、仕合せに暮す身となりました。

或

る

朝

祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寢床で小説を読んでいると、並んで寝ている祖母が、

「明日坊さんのおいでなさるのは八時半ですぞ」と云った。

暫くした。すると眠っていると思った祖母が又同じ事を云った。彼は今度は返事をしなかつた。

「それまでにすっかり支度をして置くのだから、今晚はもうねたらいいでしょう」

「わかっています」

間もなく祖母は眠って了った。

どれだけか経った。信太郎も眠くなつた。時計を見た。一時過ぎていた。彼はランプを消して、寝返りをして、そして夜着の襟に顔を埋めた。

翌朝（明治四十一年正月十三日）信太郎は祖母の声で眼を覚した。

「六時過ぎましたぞ」驚かすまいと耳のわきで静かに云っている。

「今起きます」と彼は答えた。

「直ぐですぞ」そう云って祖母は部屋を出て行った。彼は帰るように又眠って了った。

又、祖母の声で眼が覚めた。

「直ぐ起きます」彼は気安めに、唸りながら夜着から二の腕まで出して、のびをして見せた。

「このお写真にもお供えするのだから直ぐ起きておくれ」

お写真と云うのはその部屋の床の間に掛けてある擦筆画の肖像で、信太郎が中学の頃習った画の教師に祖父の亡くなった時、描いて貰ったものである。

黙っている彼を「さあ、直ぐ」と祖母は促した。

「大丈夫、直ぐ起きます。——彼方へ行つて下さい。直ぐ起きるから」そう云って彼は今にも起きそうな様子を見せてた。

祖母は再び出て行つた。彼は又眠りに沈んで行つた。

「さあさあ。どうしたんだっさ」今度は角のある声だ。信太郎は折角沈んで行く、未だその底に達しないところを急に呼び返される不愉快から腹を立てた。

「起きると云えば起きますよ」今度は彼も度胸を据えて起きると云う様子もしなかった。

「本当に早くしておくれ。もうお膳も皆出てますぞ」

「わきへ来てそうぐずぐず云うから、尚起きられなくなるんだ」

「あまのじゃく！」祖母は怒って出て行つた。信太郎ももう眠くはなくなった。起きてもいいのだが余り起きろ起きろと云われたので実際起きにくくなつていた。彼はボンヤリと床の間の肖像を見ながら、それでももう起しに来るかという不安を感じていた。起きてやろうかなと思ふ。然しもう少しと思ふ。もう少しこうして起しに来なかつたら、それに免じて起きてやろう、そう思っている。彼は大きな眼を開いて未だ横になっていた。

いつも彼に負けない寝坊の信三が、今日は早起きをして、隣の部屋で妹の芳子と騒いでいる。